

宿泊体験施設「さまのこハウス」

横山 天心
TENSHIN YOKOYAMA

■金屋町元氣プロジェクトについて

地元住民を中心とする約20名で構成され金屋町元氣プロジェクトは、2013年11月に設立され、2017年にNPO法人の認定を受けた。「高岡鑄物発祥の地として、地域住民が住みやすい街、来街者が訪れたく、住みたくなるような街」を目指し、特に子育て世代や若手クリエーターを対象とした移住を促進することを目的として、金屋町元氣プロジェクトと行政が協働で金屋町の定住促進計画の作成や情報発信事業などを行ってきた。国や県や市の支援を受けてはいるが、住人510人の小さな自治会が、県の定住促進モデル地区の指定を直接受けて（他地区は市町村行政が主体）、住民が主体となり、街の伝統や文化に誇りをもって、自分たちの街は自分たちの手でより良くしていくことを念頭に、移住促進の諸活動を行っているのは全国でも類を見ないことである。具体的には先進地視察（18回）、移住希望者と空家持主とのマツ



写真1：石畳通り側外観
(以下、写真は全て池田ひらく氏撮影)

チング（情報提供42件、空家内覧案内30件）、空家状況の調査（1回、3回実施）、御印祭（加賀藩二代藩主、前田利長公の威徳をしのんで毎年6月19・20日に金屋町で行われる祭）、金屋町薬市inさま

のこ（芸×生活×産業が同居する、高岡市金屋町の町屋と街路を使って行うゾーンコミュニティイベント、2018年より「ミラレ金屋町」に名称を変更）など金屋町の魅力を来訪者に体験してもらうイベントの企画・運営などである。

空き家を工房や住居などに利用したい方と空き家所有者とのマッチングのさらなる促進や、金屋町の良さを長期滞在によりより良く体験してもらうため、旧夏野邸を伝建地区にふさわしい内外観に改修した母屋と既存増築部を改築した新築部を併せ持つ宿泊体験施設「さまのこハウス」にすることが計画された。また、その建設資金は文化庁の修理・修景補助事業、県の移住希望者宿泊体

験サービス事業、地元企業からの寄付金、クラウドファンディングなどにより調達し、施設の建設及び運営に対して、参加メンバーが無理なく継続して活動できるように配慮されている。

■芸術文化学部の学生の関わり

本計画は2014年から始まり、当初案は、当時芸術文化学部4年生の波多野歩実さんが卒業制作の一部として、母屋と増築部を共に改築することで進められた。母屋一階の廊下部分を通り土間とし、増築部一階をキッチン十カフェ十土間として、石畳通りと千保川側の通りを土足で行



写真2：千保川側外観



写真3：中庭（母屋側外観）



写真4：中庭（新築棟側外観）



写真5: 中庭の版築の制作過程



写真6: 母屋1階 通り土間

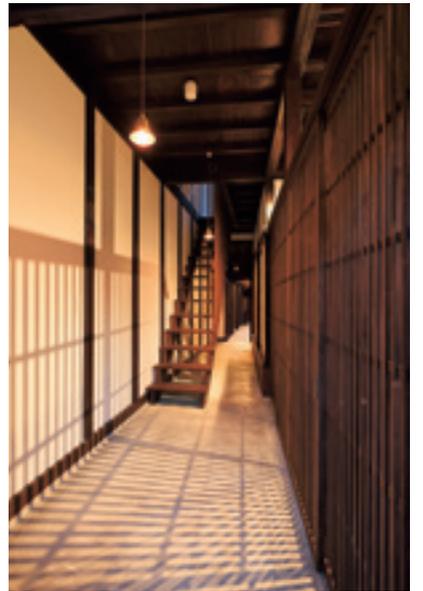


写真7: 母屋1階 通り土間 (夕景)

き来できる計画であった。その後、用途が専用住宅から簡易宿所に変更となること、施設全体として現行法規の基準を満たすことが難しいことから、石畳通りに面する母屋は改修し、増築部は解体して中庭を介して新築棟を建設し、外部の渡り廊下で繋ぐことになった。変更された方針に従い、再度基本計画をリノベーション演習Bの授業課題とし、履修生と共にスタディを重ねた。その成果をまとめた

図面と模型を学生たちが、元気プロジェクトの協議会でプレゼンテーションを行い、協議会の承認を得て、現行案のアウトフレームが固まった。そしてそれを基に、芸術文化学部卒業生の外崎夢大氏(富山クリエイティブ専門学校講

師)と協同で、基本設計・実施設計・現場監理を行った。

また、工費削減のため、中庭の土間及び砂の版築と隣地境界に設けられた千本格子は有志の学生達と協同で制作している。版築は砂・砂利・セメントの配合のスタディに始まり、型枠の制作・設置、砂・砂利・セメントの配合・充填・転圧の工程を全て自分たちの手で行った。

■金屋町の新しいライフスタイル「デュアルハウススタイル」

金屋町の町屋の敷地は間口がそれほど大きくない分奥行があり、その敷地を埋め尽くすように町屋が建てられているため、町屋の延床面積は40坪から50坪程度あるのが普

通である。その全てを、現代のライフスタイルに合わせて改修すれば費用的にも大きな負担となり、下手をすれば郊外の新興住宅地で土地を購入し住宅を建設するより費



写真8: 母屋1階 和室

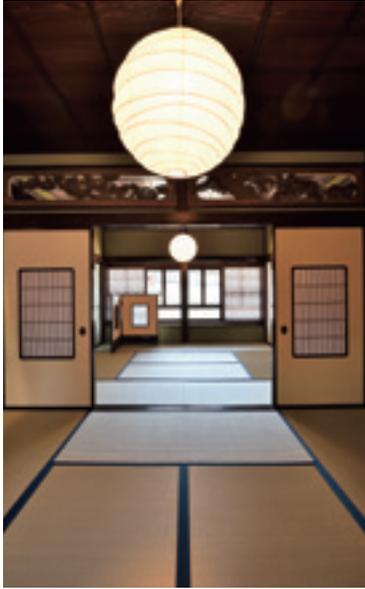


写真9: 母屋2階 和室

用がかかる場合もありえる。そこで、石畳通りのようにメインスタリットに面する部分は、文化庁の修理補助事業の補助金を用いて、建設当初の趣のある外観に復元しつつ、内部はできるだけ手をかけずに計画する一方、奥の部分は、住環境を担保する現代的な設備を設けつつ、断熱性能や気密性能を向上させるとともに、現代のライフスタイルに合った内装に大体的に改修することが望ましいと考えた。これは、同一敷地内に、住性能としてもインテリアの意匠としても新旧のスペース(住戸)を設け、時間や季節や使用用途に合わせて、それらを行き来することで得られる豊かな生活があり得ると考えたからだ。



写真10: 新築棟1階 リビング

「さまのこハウス」では、このコンセプトをより顕在化させ、石畳に面する伝統的な町屋を一部保存し、現代的な設備機器を備えた新しい町屋を中庭を介して独立して設けている。

歴史的な町屋は、ファサードや屋根等の外観を復元・修理し、内観は通り土間を復元し、襖や障子を開け放つことで水平的な空間のつながりを有する、畳や真壁によるの和のインテリアとしている。

一方、新しい町屋は、敷地の高低差を利用して設けた半地下には車庫や浴室などの水回りをまとめ、一階は中庭からキッチン・ダイニング、リビングと段状となり、その上部の個室もそれぞれ階高が異なるスキップフロア構成となっている。吹抜けを介して斜めや垂直的な空間のつながりを有し、フロアリングや大壁による洋のインテリアとしている。

さらに、双方をつなぐ中庭は、和と洋を融合した植栽を施し、砂の版築と珪砂(鑄物用の砂)の敷き詰めにより鑄物の鑄込み場を想起させる段状の構成とすることで、至る所に座って佇むことができる。新しい町屋は、歴史的な町屋では得られない空間体験を可能とすることで、歴史的な町屋の空間特性を顕在化し、双方の対照的な空間を中庭を介し

て行き来することで、より多様なシーンが生まれる。

また、古い町屋を改修して快適に過ごすためには熱環境の改善は必須だが、既存の改修施設では利用者が断熱をどの程度

度施しているかを内外観からは把握することは難しい。そこで本施設では、エアコンは据え付けているが、断熱工事を行わず、古き良き町屋をできるだけ建設当初に復元した部分(母屋)と、現代のライフスタイルに合わせた空間構成と住性能を持たせた新築部を分棟配置して明確に区分することで、移住希望者が長期滞在を通して、古い町屋と新しい町屋の各々の空間特性と熱環境を分かりやすく体験でき、自分たちがこれから改修する町屋にどの程度手



写真12: 新築棟2階 個室



写真11: 新築棟中2階 踊り場

を入れれば良さを把握し易くしている。

■終わりに

元氣プロジェクトの熱意と行動力の大きな成果の一つが、移住体験施設「さまのこハウス」の竣工であった。こうした地方の小さな町の住民主導の活動及び成果は、疲弊する地方コミュニティの再生における最も輝かしい事例の一つであり、同じ問題を抱える自治会に勇気と希望を与えるものと考えられる。元氣プロジェクトのこれまでの活動が実を結び、町屋を住居兼店舗として改修して、日本料理店やクラフトビールの製造所兼ビアバーを営む方々など四世帯が移住され、街も徐々に活気を取り戻しつつある。現在、春木家を芸術文化学部学生専用のシェアハウスとしてリノベーションする計画が進行中であり、今後も金屋町の町づくりに関わっていききたいと思う。

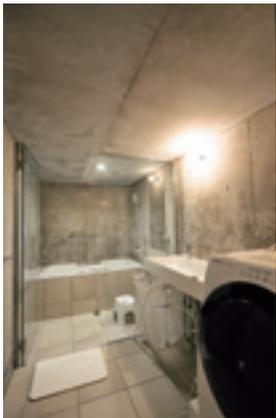
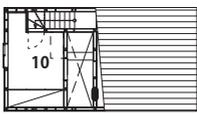
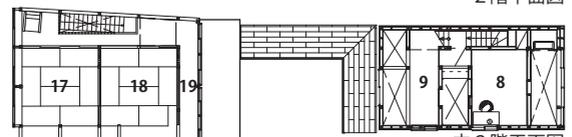


写真13: 新築棟地下 浴室

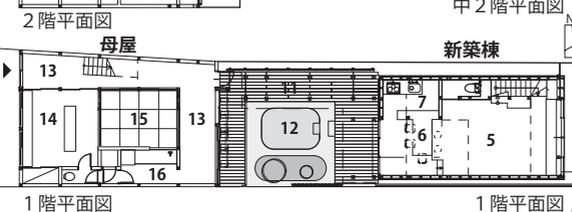
- 1. 車庫
- 2. 玄関
- 3. 脱衣・洗面室
- 4. 浴室
- 5. リビング
- 6. ダイニング
- 7. キッチン
- 8. 個室1
- 9. ロフト
- 10. 個室2
- 11. 渡り廊下
- 12. 中庭
- 13. 通り土間
- 14. ギャラリー
- 15. 和室1
- 16. キッチン
- 17. 和室2
- 18. 和室3
- 19. 縁側



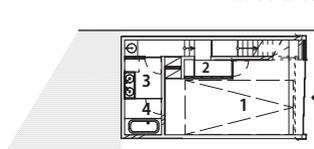
2階平面図



中2階平面図



1階平面図



地階平面図

図1: 平面図 S=1:300